

# 「次世代脳」プロジェクト 冬のシンポジウム 2022 アンケート結果

(回答 85 名)

## 1. あなたの所属を教えてください

大学・大学共同利用機関等の常勤職員 / 54

その他の非営利の学術研究機関に所属する常勤職員 / 7      大学院生 / 4

学部学生 / 3      企業 / 7      病院 / 3

その他：・JST / 1      ・その他の非営利の学術研究機関に所属する客員研究員 / 1

・大学客員教員 / 2      ・大学名誉教授 / 2      ・ポスドク / 1

## 2. 参加した日程をお答えください

・12月14日(水) am: 神経科学と情報工学の共創の場から考える脳科学研究の未来予想図 / 38

・12月14日(水) pm: 新学術領域研究「マルチスケール脳」企画シンポジウム / 40

・12月15日(木) am: 学術変革領域研究(B)ミニセッション I [情動情報学] [嫉妬の科学]  
[ハブ決定剛軟因子] / 27

・12月15日(木) pm: 合同シンポジウム 2022: 神経回路研究の新潮流 / 42

・12月16日(金) am: 学術変革領域研究(B)ミニセッション II [脳多元自発活動] [脳の全体性]  
[あいまい脳] / 39

・12月16日(金) pm: 新たな技術が拓くグリア機能と神経可塑性 / 35

・12月17日(土) am/pm: ムーンショット 目標1 金井プロジェクト  
「身体的能力と知覚能力の拡張による身体の制約からの解放  
Internet of Brains (IoB)」シンポジウム / 26

・シンポジウムに参加していない / 7

### 3. 参加したイベントのうち有意義と思われたイベントはどれでしたか

- ・ 12月14日（水） am：神経科学と情報工学の共創の場から考える脳科学研究の未来予想図 / 33
- ・ 12月14日（水） pm：新学術領域研究「マルチスケール脳」企画シンポジウム / 34
- ・ 12月15日（木） am：学術変革領域研究(B)ミニセッション I [情動情報学] [嫉妬の科学]  
[ハブ決定剛軟因子] / 35
- ・ 12月15日（木） pm：合同シンポジウム 2022：神経回路研究の新潮流 / 36
- ・ 12月16日（金） am：学術変革領域研究(B)ミニセッション II [脳多元自発活動] [脳の全体性]  
[あいまい脳] / 29
- ・ 12月16日（金） pm：新たな技術が拓くグリア機能と神経可塑性 / 32
- ・ 12月17日（土） am/pm：ムーンショット 目標1 金井プロジェクト  
「身体的能力と知覚能力の拡張による身体の制約からの解放  
Internet of Brains (IoB)」シンポジウム / 23
- ・ シンポジウムに参加していない / 8

### 4. シンポジウム開催について

是非継続して欲しい / 78      どちらでもよい / 7      必要性を感じない / 0

### 5. シンポジウム開催時期について

今年度と同じでよい / 79

その他：・ 11月 / 2      ・ 11月もしくは1月 / 1

- ・ 学期と被らないような時期を希望します / 1
- ・ 今回は全日程で大学業務と重なり参加できませんでした / 1
- ・ 大学教員にとっては大学の予定によりどの時期にしても良い時と悪い時があり、いつが良いとは断言できない / 1

### 6. ポスター発表について

是非開催して欲しい / 29      どちらでもよい / 50      必要性を感じない / 6

### 7. 「次世代脳」シンポジウムを開催した場合、どちらの方法で参加したいですか

オンラインでの参加を希望する / 60      対面での参加を希望する / 25

## 8. プロジェクト（シンポジウム開催、その他の取組）に関して、ご意見・ご感想があれば、ご記入ください

- ・ 脳研究全体の最先端、トレンドを日本語で把握できる集会として有難いです。各研究紹介も面白いのですが、国際的な日本の脳研究の位置付けや今後の目標の議論をもう少し聞きたかったです。
- ・ 発表が一方向的な感じがしました。理解を深めるためには、質疑応答の時間がもう少し長い方が良いと思います。
- ・ とてもインパクトのある取組みだと思います。オンラインでしたが「会場やオンライン先の参加者」ともうすこし活発な・ざっくばらんな質疑があるとなおよいと思いました。
- ・ 大学の仕事・動物の管理・家族の世話などで旅行が難しいので、オンラインの開催をぜひ続けてほしい。女性や臨床医師など多様な人材が参加できる鍵になると思う。
- ・ 次世代の医療やヘルスケアを担う素晴らしい取組みであり、社会への情報発信をさらに進めていくと多くの賛同が得られると感じております。ありがとうございます。
- ・ 可能であれば録画データを公開してほしい。

## 9. 脳科学研究をこれから更に推進するために必要な要素はどれでしょうか（複数回答可）

常勤職員の増員 / 59      ポスドクの増員 / 26      大学院生の増員 / 29  
補佐員の増員 / 25      ポスドクとその教育の質の向上 / 28  
大学院生とその教育の質の向上 / 35      補佐員とその教育の質の向上 / 19  
国内研究者間の研究交流 / 42      国際的な共同研究 / 31      大型研究拠点の充実 / 17  
支援拠点の充実 / 24      支援の種類の多様化 / 30      民間企業との連携 / 18  
より基礎的な研究の充実 / 47      出口の見える応用研究の奨励 / 5  
一般向けの科学コミュニケーションの推進 / 12      教育研究以外の雑用を減らす努力・工夫 / 37  
安心して研究に打ち込める環境作り / 59      異分野交流・共同研究の推進 / 33  
多様な研究者の意見を取り入れる仕組み / 25      研究成果の社会への還元 / 11  
英語使用の推進 / 8      評価・審査時の利益相反排除の徹底 / 11

## 10. 脳科学研究の将来の発展に重要と思われる要素について自由にご意見をお書きください

- ・ 外部記憶とヒトの記憶の関係性、ムーンショット目標 1 と目標 9 の連携などに関心があります。
- ・ 独立した研究者の増員
- ・ 若い人が面白いと思える研究に、安心して落ち着いて（例えば 7～10 年間）打ち込める環境を整えることが必要だと思います。
- ・ 「選択と集中」の是正、若手でもベテランでもない中年（40 代）への支援
- ・ 研究をやりやすくする環境づくりと、研究費が制約の少ない自由な形で使用できること
- ・ 多様なデータ収集とその統合
- ・ 無駄な共同研究の推進をしない。不自然なパフォーマンスだけの国際化や男女共同参画化を推進しない。
- ・ 職業としての魅力
- ・ より活発な交流と共同研究ではないでしょうか。
- ・ 積極的な若手(大学院生含む)の起用、研究費の拡充
- ・ 独立して研究できるポジションを増やす
- ・ 社会への情報発信と、社会の理解、連携
- ・ 物理
- ・ 日本で独立した研究を展開できる機会が少ないことを考慮すると、かつて中国がしたように、海外で将来独立して活躍できる人材を育成することが、将来の日本の神経科学を考えると重要と思われます。
- ・ 脳科学委員会での議論などを拝見しますと、どうしても応用研究や疾患研究に目が向きがちですが、やはり基礎脳科学の研究を幅広くサポートする体制がないと、応用研究も伸びないと思いますので、基礎脳科学研究への研究費や支援を充実させることが重要だと思います。
- ・ シンポジウムに関しては、専門家だけの会でなくて、各大学の学部生などにも周知することで脳科学研究を志す学生が増えたり、社会に出ても脳科学に関心を持つ大人が増え、研究領域としてより盛り上がっていくのではないかと思います。
- ・ 同じような動物や方法を使った研究の推進を図るのではなく、多様な動物や方法での脳研究推進を図る必要があると思われる。  
日本の特色（例えば、二ホンザルを実験動物として使用できる）を利用した脳研究の推進も図る必要があると思われる。
- ・ 教育研究以外を「雑用」と切って捨てるのは惜しい感じがします。サイエンスコミュニケーターを有効に活かすなどの活動に積極的に参加することで、18 歳以下の世代に訴求するような発展を期待したいです。
- ・ 基礎から応用まで非常に多くのかつ複雑な要素が必要であることを一般の人にさらに理解していただく。その際に現在、どの様な分野でどの様な基礎研究成果と実用成果があるのか、今後、直近、中期、長期でお飾りではない成果として何が期待できるのか、そのためにはどの様な研究が必要なのか、

時間、リソース(人、資金)等、誤解の無いようにしかし、正直ベースで共有できるといいのかもしれませんが

- 1/いわゆる 研究者と呼ばれる人の中でも 補助員的な仕事に向く人、実験をするのが向く人、マネージャー的な人 研究より教育に専念したい人 など向き不向きがある。人生のステージによって変化する場合もある。しかるに、現在の日本では一元化した価値観・キャリアパスのオプションしかない。これらの行き来をもう少しスムーズにできる環境をめざすとよいのではと感じます。
- 2/日本の特徴は一人の人が多様な仕事を引き受けなければいけないこと。入試業務や研究費にまつわる事務等、海外ではありえない仕事が研究者の足を大いに引っ張っている。むしろこの状態でも成果を上げている人たちがいることは驚嘆に値する。現在の大学の教授の忙しすぎる姿を見て、若い人達が希望を持てなくなる。女性活躍というが、そのような業務形態に耐えうる女性や男性も限られる。これは1にも通じていて、適材適所で業務を分担し、一人の人が何もかもやらねばいけない状態を改善する制度を工夫した大学を評価するなどの取り組みをすべきと思う。単に研究費を増やす、女性比率を増やすなどしても本質が変われない。
- 脳科学に限定しませんが、大型予算の集中があまり効果的に成果に結びついていないように思えます。例えば同じラボの教授と他のスタッフがそれぞれ大型予算を獲得して、出てくる論文 1 報に共同責任著者となり、それぞれの予算の成果として報告されるみたいな例がほとんど(?)で、その結果として予算の件数に比した論文成果としては乏しくなっているのかなという印象です。また、(留学先のピックラボで発表された成果などによって)一度舞台に上がるとその後は独自の成果が出ていなくても大型予算が継続的に獲得される例も海外に比べて多く、そうした予算の選択と集中のアンバランスさが、日本の科学研究の成果減少に繋がっているのではと思います。脳科学分野では例えばがんや免疫分野ほどの大規模ラボが少ないため、上述のように複数の大型予算で一つの成果、みたいな例が起こりやすいのかもしれないと思われます。ただでさえ人が少ない脳科学分野では、予算の選択と集中のやり方や基準を変えないと、欧米や中国に話される一方じゃないかと考えています。次世代脳での演者もいつもの人たちがまた話しているという感じで魅力に乏しいと別の欄に書きましたが、本当に他にいないからなのか、あるいは機会が一部界限で巡回されているのかはわかりませんが、いずれにせよ脳科学分野の発展を感じるのは難しいので、変化が必要ではないかと思えます。
- 楽しみにしていたのですが、コロナ感染により参加できず、大変申し訳ありませんでした。様々な発表があり、企画者様はとても大変だったのではと思います。ただ、色々な研究者を見てきて思ったのですが、学会やシンポジウムの開催はかなり負担が大きいのではと思います。研究する時間が無くなってしまっは本末転倒だと思えます。学生さんが先生は出張ばかりで、居ても忙しそうで声を掛けられないというのはよく聞きます。例えば、開催場所を東京 or 大阪 or 名古屋 (全国から人が集まりやすいです。海外からのお客様を考えると、京都も良いと思います。) のこの会場に固定するとか、なんとか皆様の負担が減らせればと思います。皆様優秀な方が多いので、学内業務等負担が少しでも減って、研究する時間が増えれば、自然と脳科学研究の将来の発展につながると思います。研究者が忙しすぎるのが一番の問題だと思えます。